

多賀城市内の遺跡 1

— 平成 18 年度発掘調査報告書ほか —

平成 20 年 3 月

多賀城市教育委員会

序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの遺跡は、本市の歴史が長い年月をかけて連綿と引き継がれてきた歴史のまちであることを物語っております。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務のひとつであります。このため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、埋蔵文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、本書は平成11年度及び平成18年度に市単独事業として実施した小沢原遺跡、高崎遺跡、高崎古墳群、西沢遺跡の4遺跡の調査成果と、平成18年度に市川橋遺跡第56次調査において出土した環頭大刀柄頭の科学分析を記録したものです。このうち小沢原遺跡では土器埋設構を発見し、古代の多賀城を考える上で貴重な成果となりました。また、環頭大刀柄頭については、科学分析を行うことによって、構造や製作技法に関して新たな情報を提供することになりました。

この報告書が、市民の皆様をはじめとして広く活用され、埋蔵文化財に対する关心と御理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成20年3月

多賀城市教育委員会 教育長 菊地 昭吾

例　言

- 1 本書は、平成18年度に市単独事業として実施した5件の発掘調査成果と出土遺物の科学分析結果、及び平成11年度に市単独事業として実施した発掘調査成果1件をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの連続番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土地標「平面直角座標系X」を用いている。
- 4 掘団中の高さは標高値を示している。
- 5 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原:1996)を参考にした。
- 6 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II』(多賀城市教育委員会 2003)に従った。
- 7 本書に収録したもののうち、環頭大刀の蛍光X線分析については福島県教育委員会、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターにそれぞれ依頼した。また、マイクロ・スコープの撮影については東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターから協力を得た。
- 8 本書の執筆は、調査員全員の協議のもとに、I・II・VII・VIIIを村松稔、III・V・VIを千葉孝弥、IVを吉田智治が担当し、編集は村松が行った。遺構・遺物の図版作成と写真撮影は各担当者が行った。
- 9 市川橋遺跡第56次調査において出土した環頭大刀の蛍光X線分析に関しては次の方々から御指導・御協力を賜った。
伊藤幸司(財團法人 大阪市文化財協会) 小林啓(財團法人 福島県文化振興事業団)
手代木美穂(東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター) 松井敏也(筑波大学)
- 10 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　次

| | | |
|------|--------------------------------------|----|
| I | 平成18年度市単独事業で行った発掘調査の概要 | 1 |
| II | 多賀市の地形と遺跡の位置 | 2 |
| III | 西沢遺跡第13次調査 | 4 |
| IV | 高崎遺跡第58次調査 | 6 |
| V | 高崎遺跡第61次調査 | 8 |
| VI | 高崎古墳群第3次調査 | 10 |
| VII | 市川橋遺跡第56次調査において出土した環頭大刀柄頭の蛍光X線分析について | 12 |
| VIII | 小沢原遺跡第5次調査 | 21 |

調査要項

平成18年度

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地 昭吾
 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 佐藤 慶輝
 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 係長 千葉 孝弥
 研究員 石川 俊英 武田 健市
 技師 村松 稔
 発掘調査員 廣瀬真理子 大友 貴晴
 多賀城市教育委員会文化財課 主事 吉田 智治
 4 調査協力者 志賀 久造 宮沼 弘明 小畠 誠雄 小幡よしあ 熊谷 修
 有限公司冠莊 鈴木進二朗 株式会社サンエイ

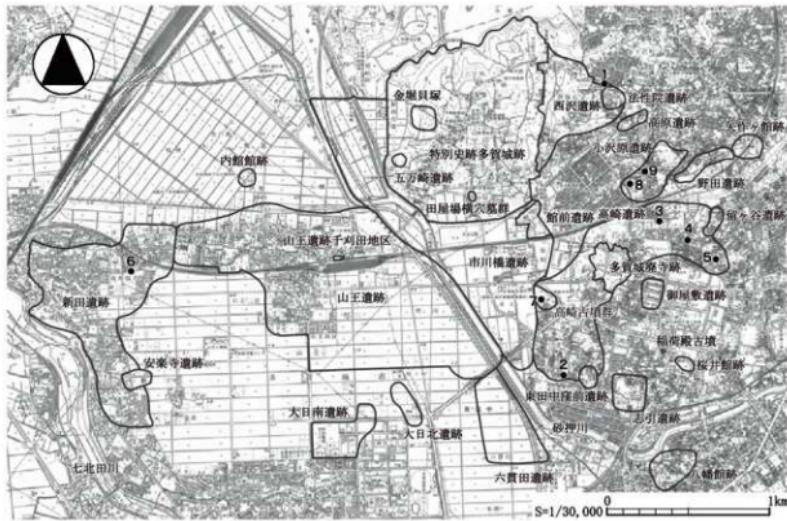
平成11年度

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男
 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 長田 幹
 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 研究員 石川 俊英
 技師 斎藤 稔
 4 調査協力者 武田 一夫 鈴木 信夫
 5 調査従事者 長田栄太郎 真野 勝雄 渡辺 正一
 6 整理従事者 熊谷 純子 浦風志恵子 坂本 英美

| No. | 調査年度 | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査担当者 |
|-----|--------|------------|-------------------------|------------|-------------------|-------------|
| 1 | 平成18年度 | 西沢遺跡第13次調査 | 浮島字高原184-9、塩竈市母子沢町124-3 | 4月24日～25日 | 50m ² | 千葉 吉田 |
| 2 | | 高崎遺跡第58次調査 | 東田中一丁目178-1 | 6月13日 | 4m ² | 村松 吉田 |
| 3 | | 高崎遺跡第59次調査 | 高崎一丁目15-21、15-49 | 9月29日 | 107m ² | 村松 廣瀬 大友 |
| 4 | | 高崎遺跡第60次調査 | 留ヶ谷一丁目95番10 | 2月20日 | 58m ² | 武田 |
| 5 | | 高崎遺跡第61次調査 | 留ヶ谷一丁目136番20 | 3月8日 | 112m ² | 千葉 武田 大友 |
| 6 | | 新田遺跡第36次調査 | 山王字北寿福寺地内 | 2月16日～19日 | 8m ² | 千葉 大友 |
| 7 | | 高崎古墳群第3調査 | 高崎二丁目228-3、504-1 | 9月15日 | 11m ² | 千葉 吉田 |
| 8 | | 小沢原遺跡第9次調査 | 浮島二丁目97-1、97-4 | 3月5日 | 124m ² | 武田 |
| 9 | | 小沢原遺跡第5次調査 | 浮島二丁目162-2 | 8月27日～9月9日 | 200m ² | 斎藤 石川 |

I 平成18年度市単独事業で行った発掘調査の概要

平成18年度に本市単独事業で行った発掘調査は8件である。遺構の分布状況などを把握するために行なった確認調査は4件であり、そのうち遺構が発見されなかったことから本発掘調査に至らずに終了したものが2件（西沢遺跡第13次調査、高崎遺跡第61次調査）あり、遺構を発見したことから原因者との協議を行い、その結果工法変更などに至らず本発掘調査に移行したもののが2件（小沢原遺跡第9次調査、高崎遺跡第60次調査）ある。一方、工事立会の結果、遺構検出面まで掘り下げたことから本発掘調査に移行したものが4件（高崎遺跡第58・59次調査、新田遺跡第36次調査、高崎古墳群第3次調査）ある。小沢原遺跡第9次調査と高崎遺跡第60次調査については本発掘調査の報告書である多賀城市文化財調査報告書第92集（以下、第92集）と第91集に概要を記載し、高崎遺跡第59次調査と新田遺跡第36次調査については、隣接地で行った本発掘調査の報告書である第91集と第93集にそれぞれ収録した。本書には、それ以外の西沢遺跡第13次調査、高崎遺跡第58・61次調査、高崎古墳群第3次調査の成果をまとめた。



1:西沢遺跡第13次調査 2:高崎遺跡第58次調査 3:高崎遺跡第59次調査 4:高崎遺跡第60次調査
5:高崎遺跡第61次調査 6:新田遺跡第36次調査 7:高崎古墳群第3次調査 8:小沢原遺跡第9次調査
9:小沢原遺跡第5次調査

第1図 調査地の位置

II 多賀城市の地形と遺跡の位置

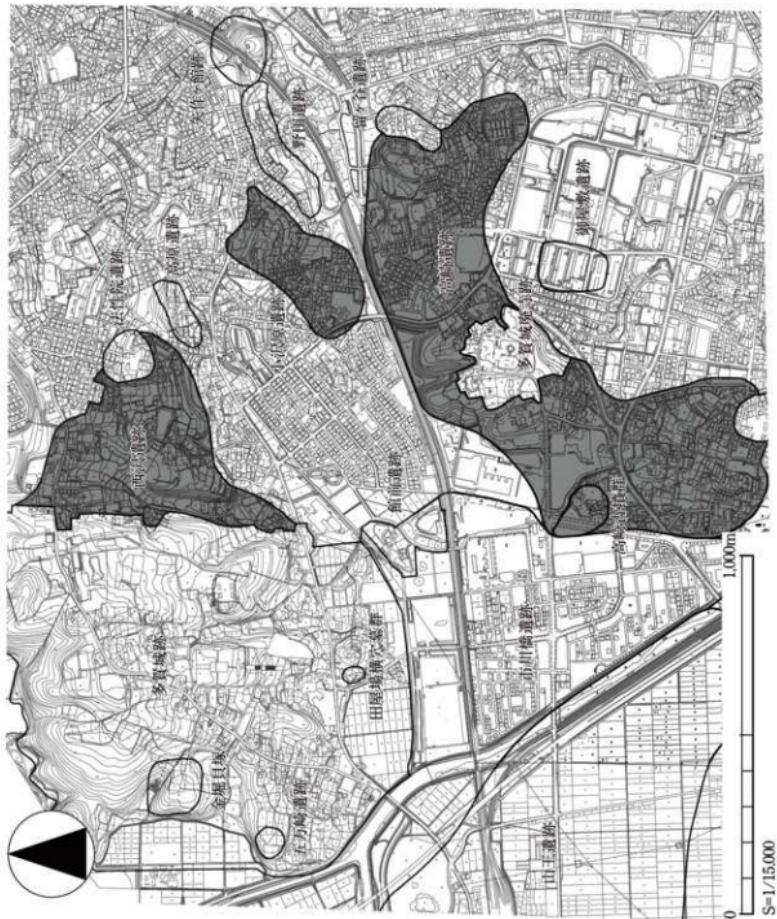
多賀城市は、宮城県中央部のやや東側に位置し、仙台市の市街地からみると北東約10kmの位置にある。南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町とそれぞれ接している。市内の地形についてみると、利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川は中央部を北西から南東方向に貫流しており、これを境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は松島・塙釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、標高を減じながら南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相を見せている。沖積地は仙台平野の北東端部に相当する。仙台市岩切方面から多賀城跡にかけての県道泉塙釜線沿いには標高5～6mの微高地が延びており、その北側には利府町にまたがる低湿地が広がっている。

本市には40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布しており、南部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、東端部には柏木遺跡や大代横穴墓群などが点在している。一方、市の北側中央付近には奈良・平安時代に陸奥国府が置かれた多賀城跡、中央付近には多賀城廃寺跡があり、これらと強い関連性がある館前遺跡、柏木遺跡、山王遺跡千刈田地区を加えた5カ所が特別史跡に登録されている。多賀城跡南側に展開する新田・山王・市川橋・高崎遺跡や東側に隣接する西沢遺跡などでも、発見された遺構や遺物には多賀城跡と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群として捉えることができよう。



第1図 多賀城市の位置

第2図 調査地の位置

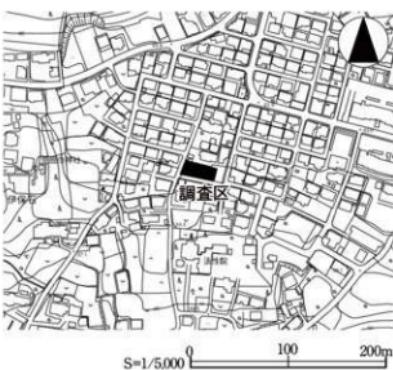


III 西沢遺跡第13次調査

1 調査区の位置と周辺の調査成果

今回の調査対象地は遺跡の北東端部にあたり、塙巣市との境界付近に位置している。本遺跡の西側には特別史跡多賀城跡が隣接し、東側には奈良・平安時代の散布地及び集落跡である法性院遺跡と高原遺跡が所在する。

本調査区の隣接地では調査は行われていないものの、第2・3次調査で大きな成果を挙げており、縄文時代と古代～近世にかけての遺構や遺物を多数発見している。多賀城外郭東門から約330m南東に位置する第2次調査では、東西を浅い谷に挟まれた平場を調査したところ、平安時代の掘立柱建物跡、堅穴住居跡や、中世の掘立柱建物跡、柱列跡、溝跡、土壙を発見している。特に中世のものについてみると、方向を同じくする建物跡にいくつかのまとまりがみられ、中には規模も大きく、庇が付いているものもある。遺物は、中国産の白磁皿や瓦質土器擂鉢、古銭、石臼などが出土しており、15・16世紀頃の年代が考えられる。多賀城外郭東門から約120m南東に位置する第3次調査では、平安時代の堅穴住居跡が14軒発見され、中には鍛冶工房と考えられるものもある。また、中世の建物跡も数棟発見しており、13・14世紀の中国産青磁碗、白磁皿、瀬戸窯産施釉陶器合子、天目茶碗、無釉陶器擂鉢、かわらけなどが出土している。



第1図 調査区位置図

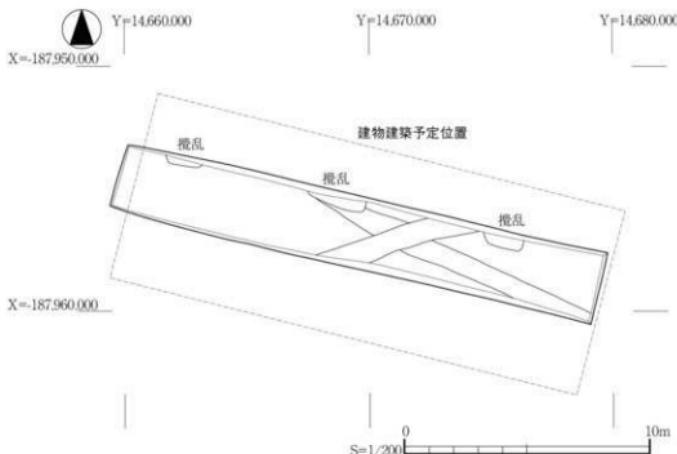
2 調査に至る経緯と経過

本調査は、共同住宅新築工事に伴うものである。平成17年3月、建設業者から当該地における埋蔵文化財について問い合わせがあった。当該地周辺に関しては資料がほとんどないことから、計画地の一部で表土の厚さを調べた結果、表土から遺構面となりうる地山まで約5cmであり、在来工法であっても基礎工事が遺構面に達する可能性が高いことを確認した。その結果を基に文化財課担当者と業者側とで協議を行ったところ、遺構が存在した場合でも影響が及ばないように工法を変更するという業者側の意向があり、3月29日に共同住宅新築工事と埋蔵文化財のかわりについての協議書が提出された。これを受けて、4月24・25日に宮城県教育庁文化財保護課の指示に基づき、事前に遺構の有無を確認するため確認調査を実施した。

24日に業者側より重機の提供を受けて表土を除去し、遺構検出作業を行った。25日に多賀城跡東門地区から測量基準点を移動して平面図を作成し、調査を終了した。

3 調査成果

表土下約5cmで地山が現れ、現代の溝や土壙など見られたが、遺構・遺物は発見できなかった。地山上には重機で掘削した痕跡が残っており、旧表土等は全く残っていないことから、地形自体が大きく改変されていると考えられる。



第2図 調査区配置図



調査区 地山上面(西より)



調査区 地山上面(東より)

参考文献

多賀城市「多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世」 1997

IV 高崎遺跡第58次調査

1 調査区の位置と周辺の調査成果

本調査区は高崎遺跡の南側に位置している。南に向かって傾斜している丘陵の南端にあり、調査区の南側は沖積地となっている。

調査区周辺では古墳時代から中世にかけての遺構と遺物を発見している。古墳時代では、第17次調査で中期の堅穴住居跡を発見しており、石製模造品とともに、その未製品や剥片などが出土していることから工房と考えている。古代では、第11次調査区で大量の灯明皿を一括廃棄した遺構を発見しており、付近で万灯会のような仏教儀式が行われたと推測している。中世では第17次調査で、南北約35m、東西40m以上の範囲を溝によって区画された武士階級の屋敷跡を発見しており、後述する高崎氏との関連が指摘されている。また第11次調査では、16世紀末頃に埋め戻された館の大溝を発見している。天正18年(1590)頃、国人領主で

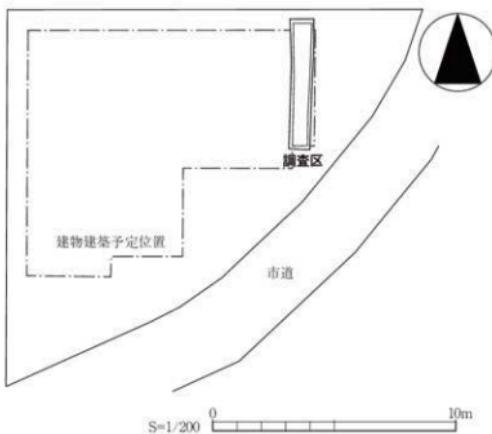
ある留守氏は、居城としていた利府城から黒川郡大谷城へ移転しているが、高崎氏の宗家である八幡氏もそれに伴ってこの地を離れたことと関係があると推測している。さらに第11次調査区の南側には「館屋敷」と呼ばれる一画がある。東西約70m、南北約60mの平場が確認されており、土塁や跡などが認められる。また、「留守家文書」の「斯波直持施行状」によると、延文元年(1465)に宮城郡高崎村は八幡氏の所領であったことがわかる。「平姓八幡氏系譜」には、八幡氏一族の彦三郎盛忠が高崎氏を称したと記されており、天正6年(1578)に高崎近江盛長が八幡氏の家督相続問題の際に功績をあげたという記述もみられる。さらに盛忠の法号は「化度寺殿」であり、現在館屋敷の西にある化度寺との関連がうかがわれる。このような文献史料の存在や地名などから、館屋敷と呼ばれる一帯は高崎氏の館跡と推定されている。

2 調査に至る経緯と経過

本件は、個人住宅建設に伴う確認調査である。平成18年4月に地権者より当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、基礎工事の際に15cmの盛土を施した後に43cmの掘削を行うものであったが、事前に当該地における表土の厚さを調べた結果、遺構検出面となりうる地山まで36~57cmと判明した。そのため埋蔵文化財への影響は軽微であると判断し、工事立会で対処することとなった。その後、地権者より基礎の東側約4mの範囲を1.15m掘削し、深基礎を設置する内容に工法を変更したいとの意向が示され、この部分での埋蔵文化財への影響が懸念されることになった。ただし、掘削面積が狭いことから工事立会で対処することとなった。調査にあたっては地権者側から重機の提供を受け、基礎掘削時にあわせて6月13日に実施した。その結果、地山を確認したことから遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は発見できず、同日中に終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 平面図

3 調査成果

表土を除去すると直ちに地山である岩盤が現れたが、遺構・遺物は発見できなかった。



調査区 地山上面(南より)

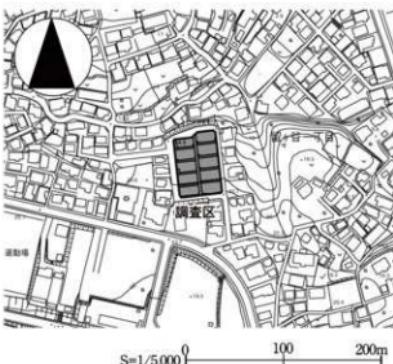
参考文献

- 多賀城市教育委員会 「高崎道路－第11次調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第37集 1996
- 多賀城市教育委員会 「高崎道路－第17次調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第61集 2001
- 多賀城市 「多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世」 1997

V 高崎遺跡第61次調査

1 調査区の位置と周辺の調査成果

今回の調査区は遺跡の北東部に位置しており、周辺では古墳時代から近代までの遺構と遺物を発見している。古墳時代のものでは、第56次調査で7世紀前半頃の須恵器の窯跡を発見しており、多賀城創建以前の状況を知る上で注目される。奈良時代から平安時代では、第26次調査で床張りの建物を含む複数の掘立柱建物跡を発見しており、柱筋をそろえて配置されているものもあることから、官人層の邸宅であった可能性も考えられる。また、第12・16次調査では暗渠や外延溝を持つ堅穴住居跡を発見しており、多賀城廃寺に係わる工房の可能性もあると見ており。中世の遺構としては、第19・37次調査において掘立柱建物跡などを発見しており、隣接する留ヶ谷遺跡・野田遺跡・矢作ヶ館跡といった館跡との関連性がうかがわれる。近代では、第16次調査で一辺約9mもある大規模な井戸跡を発見している。南に隣接する留ヶ谷字影屋敷には、太平洋戦争時に海軍工廠に係わる工具養成所及び男子学生寮が配置されており、この井戸はこれらを建設する際に使用されたと考えている。



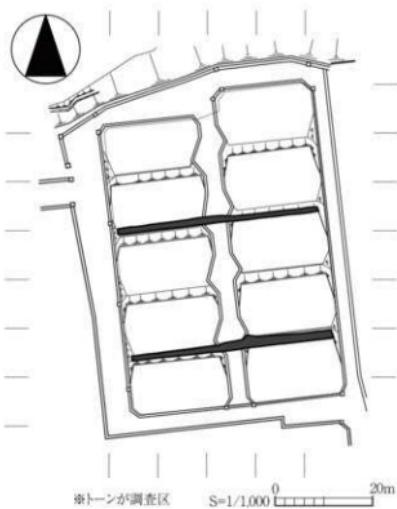
第1図 調査区位置図

2 調査に至る経緯と経過

本件は、宅地造成に係る確認調査である。当該地は留ヶ谷市営住宅が解体・撤去された跡地であり、市営住宅建設時に丘陵北斜面を東西二列、南北五段の区画に整地するなど、既に地形が大きく改変されている。平成19年1月、当該地を購入した建設業者が宅地造成工事を計画したことから埋蔵文化財とのかかわりが生じた。その計画は南北五段の区画を三段に造成し、それぞれの区画の北側および道路側に擁壁を設置しようというものであった。可能な限り埋蔵文化財に影響を及ぼすことのないよう協議を重ねたが、擁壁設置に伴い上段と中段の区画の北側を一部掘削することから、確認調査を実施することになった。2月22日に宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書の提出を受け、3月8日重機を使用して確認調査を実施し、同日終了した。

3 調査成果

表土を除去すると直ちに地山が現れ、遺構・遺物ともに発見できなかった。市営住宅建設時に地形が大きく改変されたと考えられる。



第2図 調査区配置図

参考文献

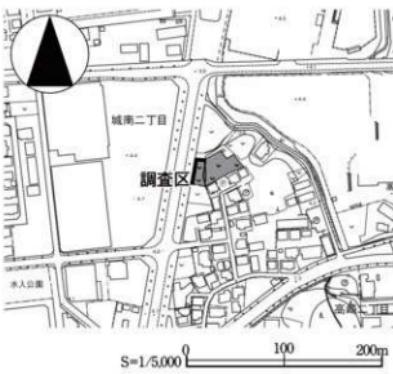
- 多賀城市教育委員会「高崎遺跡－第13～16次調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第42集 1996
多賀城市教育委員会「高崎・西沢遺跡－高崎遺跡第26次・西沢遺跡第7次調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第63集 2001
多賀城市教育委員会「高崎遺跡－第56次調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第89集 2007
多賀城市「多賀城市史 第2巻 近世・近現代」 1993

VI 高崎古墳群第3次調査

1 調査区の位置と周辺の調査成果

本調査区は遺跡のほぼ中央に位置している。西に向かって低くなっている丘陵の西端部に位置しており、西側には沖積地が広がっている。

本古墳群には、かつて3基の古墳があったとされるが、本調査区の北側にあった高まりは第1次調査の結果残丘の一部と判明し、東側の高崎中学校校内にあったとされるものについては所在を確認できない。現在は直径40m、高さ8mの最も大きな円墳が確認できるのみである。しかし、これについても段築や周溝は確認できず、葺石や埴輪も発見されていない。古墳としての実態については不明な点が多い。本古墳群においては、これまで城南土地区画整理に伴う第1次調査と農地整備に伴う第2次調査を行っているが、発見した遺構は掘立柱建物跡や竪穴住居跡などいずれも古代のものである。古墳時代のものは発見されていない。



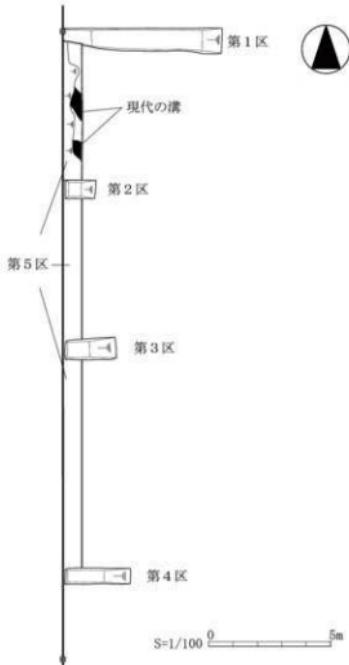
第1図 調査区位置図

2 調査に至る経緯と経過

本調査は、共同住宅新築工事に伴うものである。平成18年7月27日に地権者より当該地における共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画内容は、建物本体の基礎工事については現地表より約40cm掘削し、擁壁については掘削を行わず現地盤に直接RC土留めを設置してその後に盛土を施すというものであった。当該地においては平成14年に第2次確認調査を実施し、現地表より約1.2m下に遺構検出面を確認しているため、建物本体の基礎工事については埋蔵文化財への影響は軽微であると判断し工事立会で対処することになった。擁壁については、協議の終盤になり配置と工法の計画を変更したいという地権者側の意向が示され、東西5m、南北25mの範囲にわたり、深さ30cm、幅70cmの掘削を伴う計画に変更となった。そのうち東西方向の擁壁位置については第2次調査区の範囲内であったが、遺構が存在しない部分であった。ただし南北方向の擁壁位置については調査区の範囲外にあるため、その該当する範囲において盛土や表土を除去し、遺構確認作業を実施することで了解を得た。調査にあたっては地権者側から重機の提供等協力を受けて9月15日に実施し、同日中に終了した。

3 調査成果

第1区と南北方向の擁壁設置部分の北端部については、表土を除去すると直ちに地山である岩盤が現れたが遺構は発見できなかった。擁壁設置部分の南側と第2～4区については、全体的に搅乱されており、遺構・遺物ともに発見できなかった。搅乱の深さは現地表から44～58cmまで及んでおり、擁壁の基礎はその埋土内に収まると判断できたことから調査を終了した。



第2図 調査区配置図



第1区 地山上面 (西より)



第5区 搅乱状況 (南西より)

(註) 本道路については、丸山開古墳群の名でも呼ばれているが、ここでは遺跡名を付した際の経緯を重視し高崎古墳群で統一した。

参考文献

- 多賀城市教育委員会「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
- 多賀城市「多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世」1997
- 多賀城市「多賀城市史 第4巻 考古資料」1991

VII 市川橋遺跡第56次調査において出土した環頭大刀柄頭の蛍光X線分析について

1はじめに

平成18年度に実施した市川橋遺跡第56次調査において、双竜式の環頭大刀柄頭が出土した(第1・2図)。この遺物は、多賀城南面に広がるまち並みのうち南1道路の建設に伴う整地層から出土しており、遺物の年代は古墳時代後期(6世紀後葉頃)と考えられる。双竜式で出土状況が明確なものに限れば、東北では福島県福追横穴墓群から出土したものに統いて2例目であり、また最北の出土例となる。これは多賀城創建以前において中央政権とこの地域との強い関係を示すものとして注目できる。さらに、これまで当該地区における古墳時代後期の様子は、古墳や横穴墓、集落跡などの過去の調査で次第に明らかになりつつあったが、この発見は支配者の実像に具体的に迫ることが出来る資料として、高く評価できる。

本資料の詳細については既に刊行した報告書で述べているところであるが、本稿はこのうち未報告であった蛍光X線分析についてまとめたものである。

2 調査方法

(1) 使用機器

X線分析顕微鏡(堀場製作所製 XGT-2700)

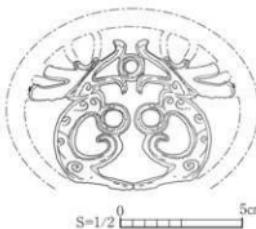
(2) 測定条件

X線管球: ロジウム(Rh)、検出器: 半導体検出器、測定雰囲気: 大気、X線管電圧: 50kV

X線管電流: 1.0mA、コリメーター: 100 μm、測定時間: 60 ~ 300秒

3 調査の経緯

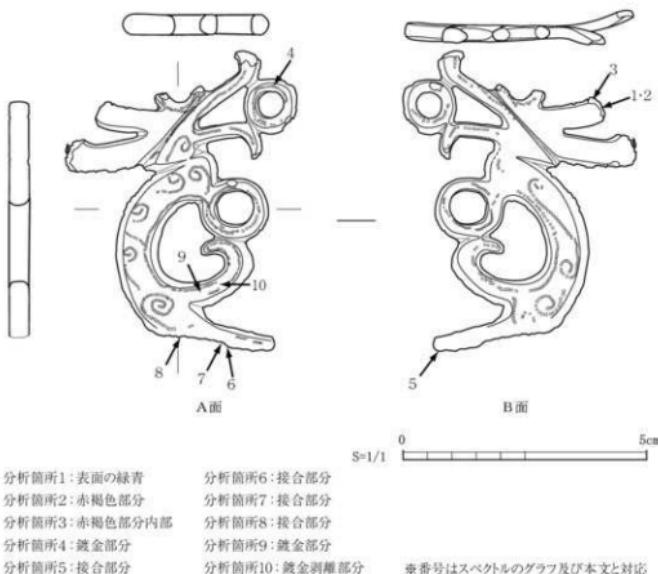
遺物のクリーニング及び実測図作成を終了したことを受け、平成18年10月25日に構造及び環と竜本体との接合方法を調べるために蛍光X線分析及び元素マッピングを実施した(註1)。その結果、蛍光X線分析においては主要な構成元素と考えられる銅、金とともに鉄が顕著に検出され、また元素マッピングでは銅、金、鉄がほぼ遺物の全面において確認された(第7図)。この結果と下記に詳述した破断面等の観察結果から、これが鉄地金銅装等の構造によるものではないかという問題提起がなされた。この問題を検討するために平成19年5月2日に再度詳細な分析を行った(註2)。次項では2回目の分析を中心説明する。



第1図 環頭大刀柄頭復原図

(註1) 発掘調査を担当した村松と蛍光X線分析を担当した小林啓氏(財團法人 福島県文化振興事業団)で行った。

(註2) 伊藤幸司(財團法人 大阪市文化財協会)、松井敏也(筑波大学)両氏の協力の下、村松と小林が分析を行った。



第2図 環頭大刀柄頭実測図と蛍光X線分析箇所

4 分析の経過と結果

分析箇所とそのスペクトルについては、第2～6図に示した通りである。以下、目的ごとに分析箇所の結果を説明する。

(1) 地金及び鍍金層の構成元素について(第2図・分析箇所1～4)

環に近い部分などにおける破断面を表面観察したところ、地金については内側に赤褐色、その外側に青緑色が分布し、鍍金層はこの青緑色部分のさらに外側に貼り付いている(写真図版)。環頭大刀の場合は地金が銅が多いことが多いため、今回は外観上異なるこの二つの部分が金属成分の違いに起因するかどうかに着目して分析を行った。

分析箇所1：銅が顕著に検出され、鉄が微小なピークで現れた。

分析箇所2：銅が最も顕著に検出され、鉄・金が1よりは強くピークが現れた。

分析箇所3：前述した1と2ではいずれも鉄が検出されており、これが埋土の影響なのか、鉄地金銅装等の構造によるものかを検証するために、2における赤褐色部分の表面を削り地金の内部を露出させた所を測定した。その結果、銅のピークのみが顕著に検出され、鉄のピークは微小となった。

分析箇所4：鍍金部分に分析を加えるため、この箇所について行ったところ、銅と鉄とともに金が顕著に検出され、さらに微量に水銀が確認できた(註3)

以上の結果から、地金は銅で、表面に金アマルガム法による鍍金が施されていることが明らかとなった。

(2) 製作技法—環と竜本体との接合方法について—(第2図・分析箇所5~10)

環頭大刀の製作技法や年代を考える際に、環と内部を一体で鋳造するか別造りで行うかは重要な要素となる。今回出土したものは内部の竜本体のみであるが、環と接合していたと考えられる箇所が遺存していた。肉眼及び実体顕微鏡を用いた観察では、金属等による蝋付けやほぞ穴による接合を認めるることはできず、この問題を明らかにすることはできなかった。しかしながら、表面上認識できなくとも接合する際に使用された金属が遺存していれば、接合箇所に偏ってある特定の元素が分布していると推察された。先に行なった元素マッピングでは、錫が遺物の下端に偏って分布していることが指摘されていたことから、蛍光X線分析によってこの箇所を重点的に分析した。

元素マッピング：検出された元素のうち、銅・金・鉄・錫の分布を示した(第7図)。その結果、他の元素は全体に及んで分布しているが、錫については遺物の下端においてのみ分布している。

分析箇所5：銅が顕著に検出された。

分析箇所6~8：銅・鉄が顕著に検出され、次いで錫が検出された。

分析箇所9・10：6~8で検出された錫が他の箇所でも検出されるか検証を行うため、この2箇所において分析を行なった。その結果、銅・鉄・金が顕著に検出されたが、錫は検出されなかった。

以上のことから本資料については環と竜本体を接合させるために錫を使用した可能性が考えられる。このように接合材として錫を用いた例は、島根県連行1号横穴出土の銅製主頭大刀や島根県原田遺跡出土の双竜環頭大刀がある。前者の例では銅製の板を接合したと見られる箇所に、後者の例では環と本体との接合箇所でそれぞれ錫を検出しており、今回の分析結果とあわせて注目される。環頭大刀については科学的な分析例が少ないとても、今後類例の増加とあわせて検討していくべき課題と考えられる(註4)。

5 まとめ

- (1) 市川橋遺跡第56次調査出土の環頭大刀柄頭は、銅の地金に、水銀を用いた金アマルガム法により鍛金されたと考えられる。
- (2) 環と竜本体を接合させるために錫を使用した可能性が考えられる。

(註3) 分析箇所2・4・9のグラフでは金のピークの右に隣接して水銀によるものと思われるピークが重なって見てとれる。

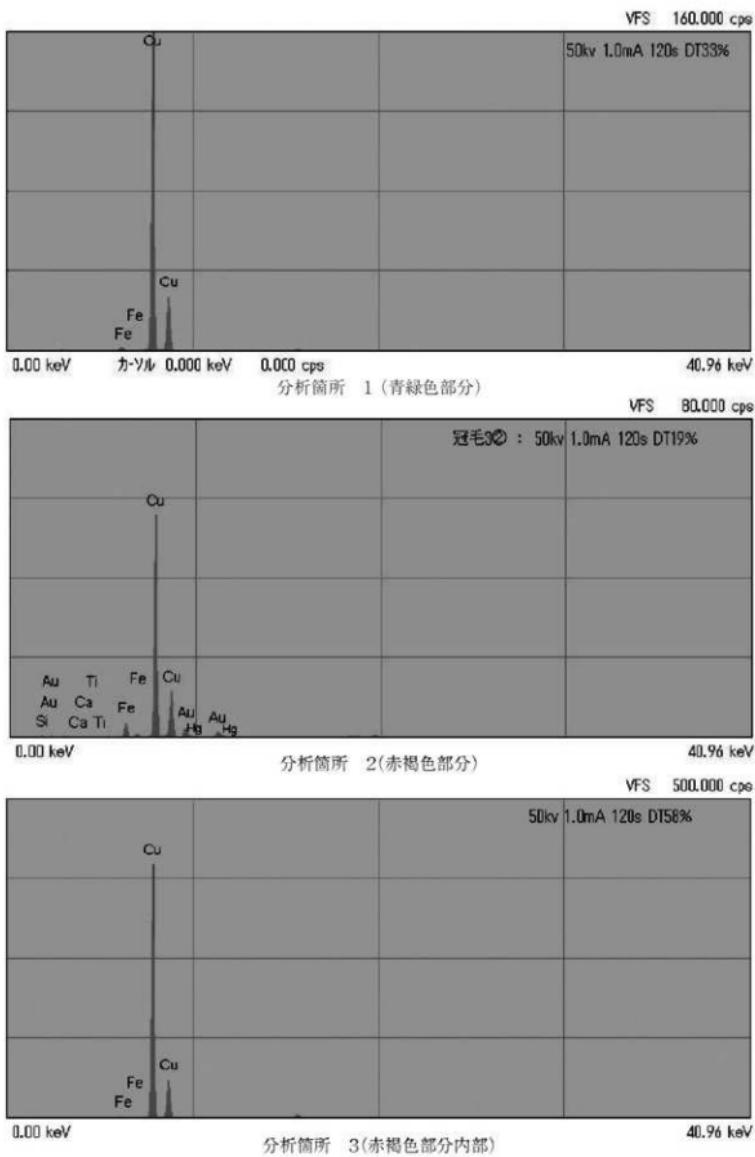
加えて、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターで別途実施した波長分散型による分析(担当:手代木美穂氏)

分析装置:理学電気製 波長分散型蛍光X線分析装置においても水銀が検出されていることから、アマルガムによる鍛金と考えられる。

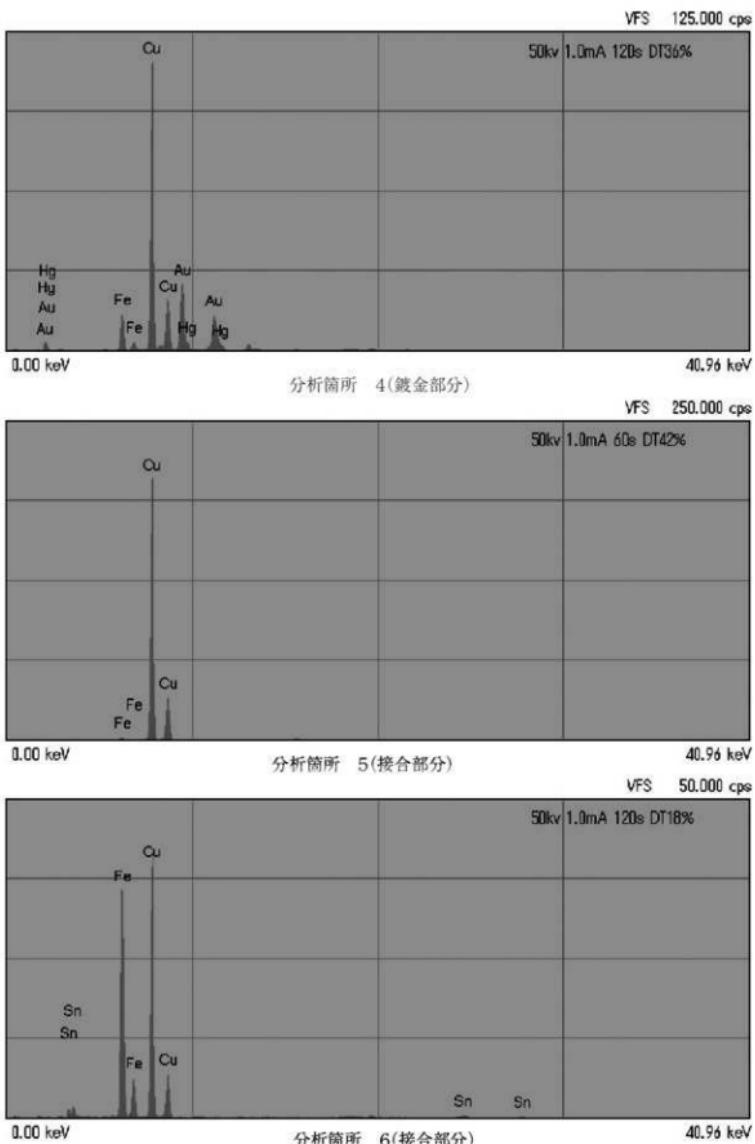
(註4) 具体的な接合方法については、錫と鉛の合金であるハンダの使用も考えられたが、スペクトルからは鉛のピークを明確に見いだすことができなかった。

参考文献

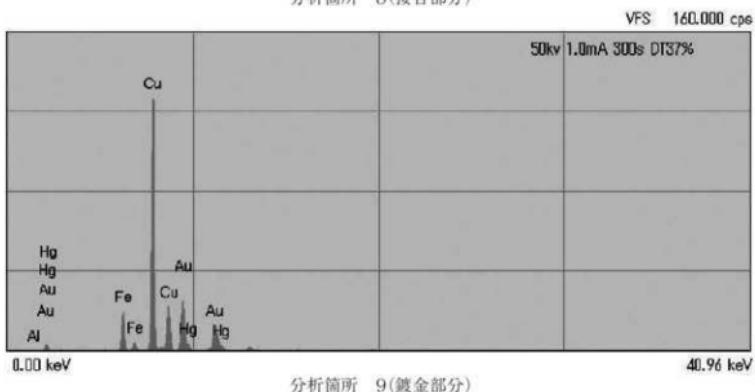
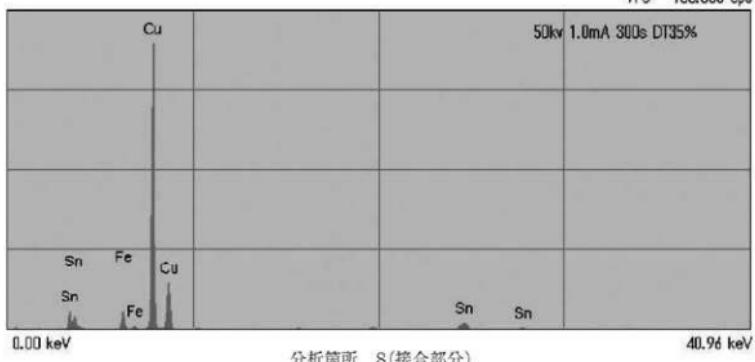
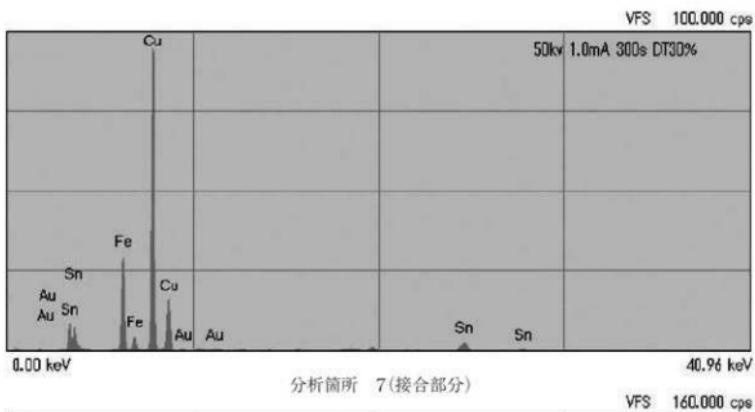
- 多賀城市教育委員会「多賀城市内の遺跡2—平成18年度発掘調査報告書—」多賀城市文化財調査報告書第87集 2007年
島根県教育委員会「家ノ脇遺跡原田遺跡1区前田遺跡4区—尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4—」2004年
塚本俊夫 萩井卓徳 植田直見 菅野裕子「古代金工技術における鍛膜・接合材としての錫利用の新事例」「文化財科学会要旨集」2004年



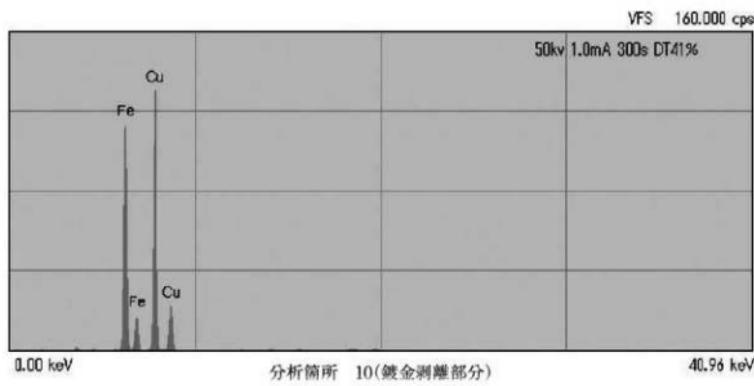
第3図 測定箇所1～3の蛍光X線スペクトル



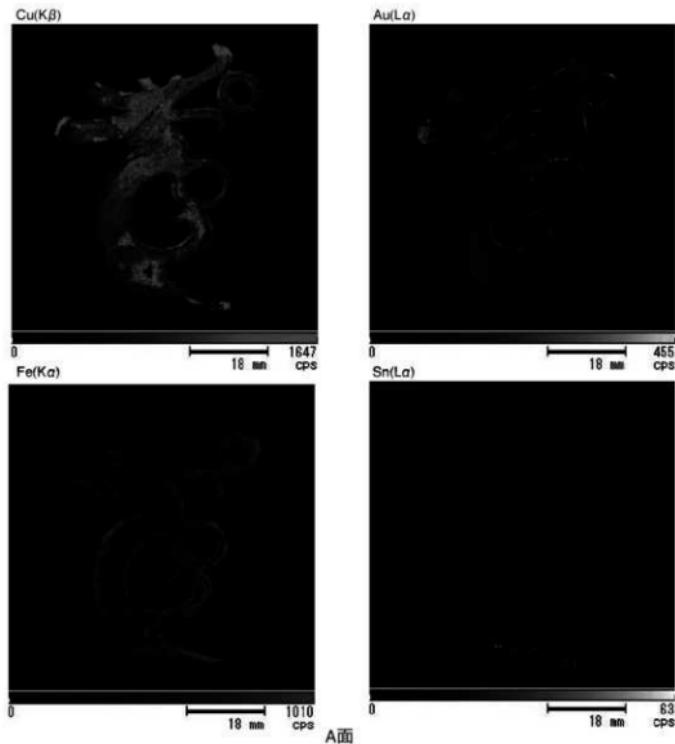
第4図 測定箇所4～6の蛍光X線スペクトル



第5図 測定箇所7～9の蛍光X線スペクトル



第6図 測定箇所10の蛍光X線スペクトル



第7図 蛍光X線元素マッピング画像



①冠毛欠損部



②冠毛欠損部



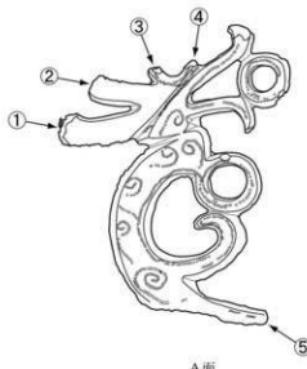
③冠毛欠損部



④角欠損部



⑤体部下端欠損部



写真図版 マイクロスコープ写真

VIII 小沢原遺跡第5次調査

1 遺跡の概要と調査区の位置

本遺跡は塩竈方面から伸びる低丘陵の西端付近に位置しており、遺跡の北東部は塩竈市にも及んでいる。標高は10～20mであり、北東側から南西側に向かってやや急に下っている。本遺跡南側の谷状地形を挟んだ丘陵上には、多賀城の付属寺院として知られる多賀城廃寺や、古墳時代から近世にかけての複合遺跡である高崎遺跡などが立地している。今回の調査区は遺跡のほぼ中央部に位置しており、標高は20m前後である。これまで本遺跡では10次にわたる発掘調査を実施しており、古代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土壙などが発見されている。その多くは第1～3・10次調査区で発見されており、第1・2次調査区では桁行5間以上、梁行3間の建物跡が、また第10次調査区では桁行5間以上の建物跡が確認されるなどいずれも官人層の居宅の可能性があると考えられている。また、昭和27年に本調査区より約400m南西側の地点で、大量の古錢が発見されている。大部分が紛失したとされているが、残存する204枚が全て中国錢であることから中世の備蓄錢の可能性を考えられている。

2 調査に至る経緯と経過

本調査は、道路と擁壁工事に係わるものである。平成11年8月5日に地権者より当該地における道路と擁壁工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。その計画では住宅へ入るための道路と擁壁を新設するもので、現地表から1～2mの掘削を伴うものであった。そのため、埋蔵文化財への



第1図 第5次調査区と周辺の調査区

影響が懸念され、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、申請された計画で実施することに決定した。8月25日に地権者から発掘調査依頼書の提出を受け、8月27日から調査を開始した。調査は重機により表土（I層）の除去から取りかかった。遺構検出を行ったところ、9月1日にSX34土器埋設遺構を発見し、その精查と図面作成・写真撮影などを行った。9日には全ての記録作成と器材の撤収を完了し、現地発掘調査を終了した。

3 調査成果

(1) 層序

I層：現表土であり、北側ほど厚く0.5～1.2mである。

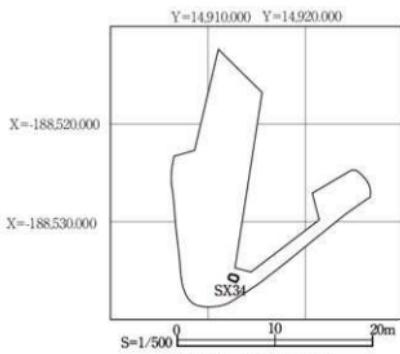
II層：岩盤であり、この上面が遺構検出面となる。

(2) 発見した遺構と遺物

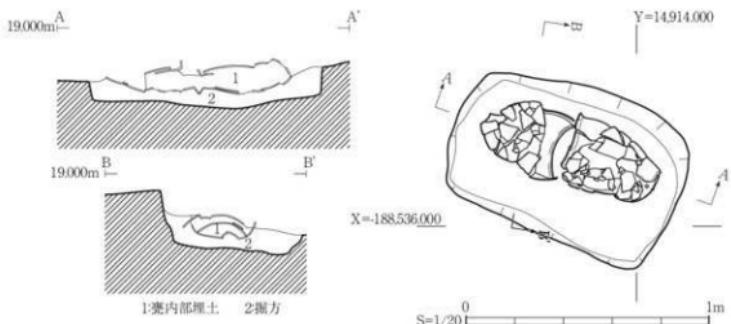
SX34土器埋設遺構

調査区南側のII層上面で発見した土器埋設遺構である。2個体の土器壺（B類）の口縁部を向かい合わせにして横位で埋設したものである。その主軸方向は西で約19度北に偏している。土器壺は掘方に対しやや北西寄りに位置し、底面からは浮いた状態で埋設さ

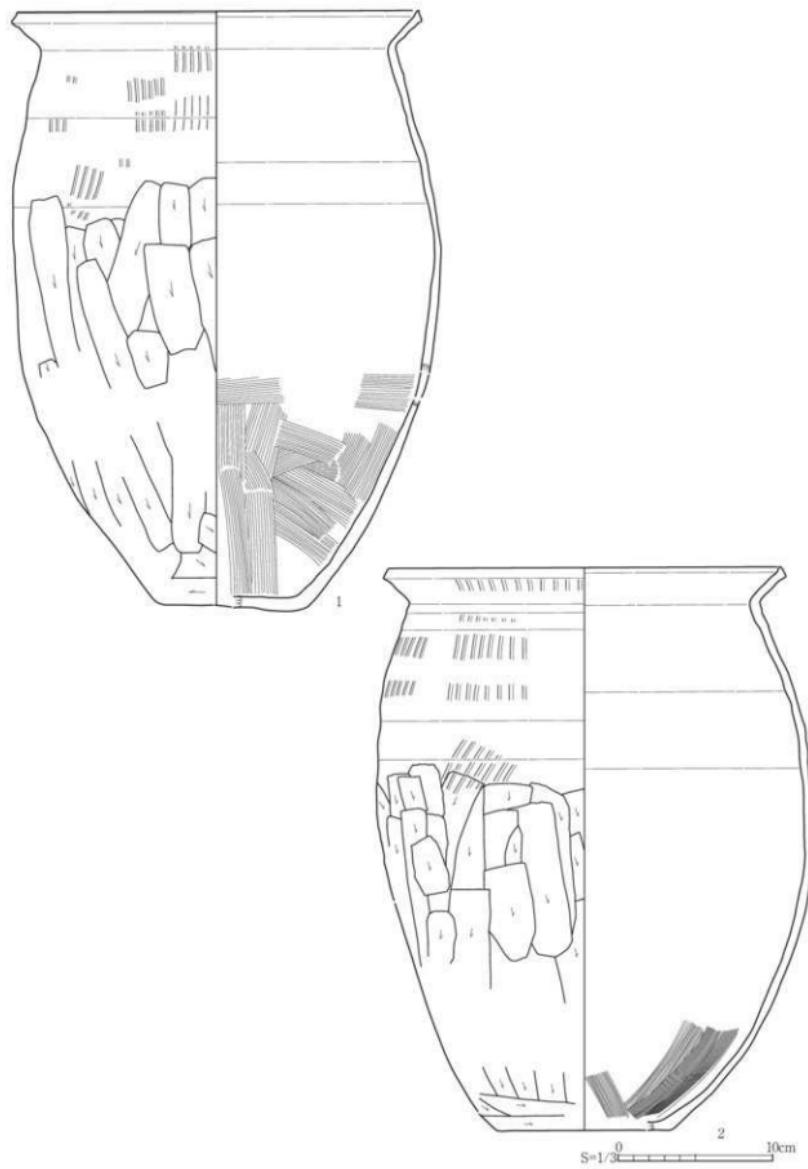
れている。壺はつぶれてはいたもののほぼ完全な状態で復元できたものであり、法量や胎土は近似している。掘方の平面形は長方形であり、規模は長辺97cm、短辺64cm、深さ22cmである。壁面はいずれもほぼ垂直に立ちあがり、底面は平坦である。埋土は2層に区分でき、1層は壺内部に堆積した褐色粘土であり、その中からは何も確認できなかった。2層は掘方埋土であり、岩盤ブロックを多く含む暗灰黄色粘質土である。



第2図 遺構配置図



第3図 SX34土器埋設遺構 平面図・断面図



第4図 SX34土器埋設遺構 出土土器

| 番号 | 種類 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 | 単位(cm) |
|----|-------|-------------------|----------|---------------|--------------|------|----------|----------|----|--------|
| | | 外面 | 内面 | | | | | | | |
| 1 | 土師器・壺 | 叩き→ロクロナデ→手持ちヘラケズリ | ロクロナデ、ナデ | 26.0 24/24 | 9.0 12/24 | 37.9 | 2 | R1 | 東側 | |
| 2 | 土師器・壺 | 叩き→ロクロナデ→手持ちヘラケズリ | ロクロナデ、ナデ | 25.6 24/24 | 9.5 5/24 | 36.3 | 3 | R2 | 西側 | |

表1 SX34土器埋設遺構 出土遺物観察表

4 考察

(1) 遺構の年代

出土した2個体の土師器壺は、いずれも外面を叩き成形した後にロクロ調整が施されている。同様の特徴を持つものは多賀城跡SI2153出土土器、市川橋遺跡SX1351C出土土器の中に含まれており、その年代は、SI2153出土土器が9世紀初頭以降9世紀前半でも古い頃(9世紀前葉頃)、SX1351Cは本簡との共伴関係から延暦9年(790)以降延暦24年(805)以前に位置づけている。また、このような特徴をもつ土師器壺は、SX1351C期に後続し、下限が9世紀中頃と考えられる市川橋遺跡SX1351D期3層や、宝亀11年(780)を上限とし貞觀11(869)年以降さほど下らない時期を下限としている多賀城跡SK2272出土土器にもみられることから、9世紀中頃まで存在することが知られる。ただし、この時期の土器群でも全く含まないものもあることから、年代が新しくなるにつれ土器組成の中に占める割合は低くなるものと考えられる。これらのことから、SX34から出土した土師器壺の年代は8世紀末~9世紀中頃と考えられる。

(2) 遺構の性格

平安時代の土器埋設遺構のうち土師器壺を横位で埋設したものは、多賀城市内では山王遺跡や市川橋遺跡、高崎遺跡で発見されており、本例を含めると28基発見されている。同様のものは青森県から長野県、新潟県までの東日本の広範囲に認められ、その中でも宮城県多賀城市および岩手県北上川流域の遺跡から多く発見されている。その検出状況をみると、道路跡やその延長線上で発見され、道路に関する祭祀などが想定される例や、墓域のなかで発見され、その規模から小児用の墓と考えられる例がある。また、集落のはずれで発見され他の遺構などとの関連が積極的に見出せない例もある。

今回は土器埋設遺構が1基発見したのみであり、調査区も狭く、隣接地も調査していないことから、他の遺構との直接的な関係は明らかではない。さらに多賀城南面の方格地割が施行された地域からも離れた位置にあることから、道路跡との関連についても考えにくい。したがって、現状ではこの遺構の具体的な性格を考える手がかりがなく、今後周辺における調査の進展を待って改めて考えてみたい。

5 まとめ

個体の土師器壺を埋設した土器埋設遺構を1基発見した。年代は土器の特徴より8世紀末から9世紀中頃と考えられる。

参考文献

- 多賀城市教育委員会「高崎遺跡ほか－高崎遺跡第49・51次調査 高崎遺跡第50次調査 東田中窪前遺跡第4次調査－」多賀城市文化財調査報告書第82集 2007
- 多賀城市教育委員会「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－」多賀城市文化財調査報告書第77集 2003
- 宮城県多賀城跡調査研究所「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992」 1993
- 宮城県多賀城跡調査研究所「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994」 1995



1 SX34 土器埋設遺構（北西より）



2 土師器甌 (R1)



3 土師器甌 (R2)

写真図版（小沢原遺跡第5次調査）

報告書抄録

| | |
|--------|---|
| ふりがな | たがじょうしないのいせき |
| 書名 | 多賀城市内の遺跡 1 |
| 副書名 | 平成18年度発掘調査報告書ほか |
| シリーズ名 | 多賀城市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第90集 |
| 編著者名 | 千葉孝弥・村松 稔・吉田智治 |
| 編集機関 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター |
| 所在地 | 〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134 |
| 発行年月日 | 西暦2008年3月28日 |

| ふりがな 所取遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|-------------------------------|---|--------|-------|-------------------|--------------------|----------------------|-------------------|---------|
| | | 市町村 | 通跡番号 | | | | | |
| にしづわ 西沢遺跡 (第13次調査) | みやぎけんたがじょうしうきしまあさひかほら 宮城県多賀城市浮島字高原184-9、 しおがましきはなこざわちよう 塩竈市母子沢町124-3 | 042099 | 18017 | 38度 17分 31秒 | 140度 59分 37秒 | 20060424 20060425 | 50m ² | 共同住宅建設 |
| たかさき 高崎遺跡 (第58次調査) | みやぎけんたがじょうしうきしまめぐら 宮城県多賀城市東田中一丁目178-1 | 042099 | 18018 | 38度 17分 38秒 | 140度 59分 33秒 | 20060613 | 4m ² | 個人住宅建設 |
| たかさき 高崎遺跡 (第61次調査) | みやぎけんたがじょうしうきしまめぐら 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目136-20 | 042099 | 18018 | 38度 17分 38秒 | 140度 59分 33秒 | 20070308 | 112m ² | 宅地造成 |
| たかさきこふんぐん 高崎古墳群 (第3次調査) | みやぎけんたがじょうしうきしまかさき 宮城県多賀城市高崎二丁目228-3、 504-1 | 042099 | 18002 | 38度 17分 38秒 | 140度 59分 33秒 | 20060915 | 11m ² | 共同住宅建設 |
| 小沢原遺跡 (第5次調査) | みやぎけんたがじょうしうきしま 宮城県多賀城市浮島二丁目162-2 | 042099 | 18043 | 38度 18分 04秒 | 140度 00分 14秒 | 19990827 19990909 | 200m ² | 道路・擁壁工事 |

| 所取遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|------------------|----------|-------------------|--------|------|---------------------------------|
| 西沢遺跡 (第13次調査) | 集落 | 古代・中世 | | | |
| 高崎遺跡 (第58次調査) | 集落・都市・城館 | 古墳時代・古代・ 中世・近世 | | | |
| 高崎遺跡 (第61次調査) | 集落・都市・城館 | 古墳時代・古代・ 中世・近世 | | | |
| 高崎古墳群 (第3次調査) | 円墳 | 古墳時代 | | | |
| 小沢原遺跡 (第5次調査) | 集落・散布地 | 古代・中世 | 土器埋設遺構 | 土師器甕 | 2個体の土師器甕を埋設した 土器埋設遺構を1基発見した。 |
| 要約 | | | | | |

多賀城市文化財調査報告書第90集

多賀城市内の遺跡1

—平成18年度発掘調査報告書はか一

平成20年3月28日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022)368-0134
発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話 (022)368-1141
印刷 今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町2-10
電話 (022)288-6123
